メディア教育研究　第2巻　第1号
Journal of Multimedia Aided Education Research 2005, Vol. 2, No. 1, 121－135

研究資料

大学生のための英語リメディアル教育e-Learning教材 “*University Voices*”の開発

國吉　丈夫[1)]・神保　尚武[2)]・石田　雅近[3)]・木村　松雄[4)]
酒井　志延[5)]・笹島　茂[6)]・生内　裕子[7)]・河内山　晶子[8)]
染谷　泰正[4)]・Renée A. Sawazaki[9)]・Elizabeth J. Lange[10)]
中原　淳[11)]・小野　博[12)]

1980年代の初めから導入され始めた「ゆとりある教育」の教育政策が、結果的にはわが国の初等、中等教育の質の低下をもたらしたこと、90年代になってから大学、特に私立大学で、多様な入試制度が導入されたこと、さらには92年をピークにして以降18歳人口の急激な減少があり、事実上応募者全員入学となっている大学が増加したことなどによって入学時の英語学力が不十分な学生が急増した。この英語学力が不十分な新入生への対処をどのようにするかが現在、日本の大学、特に多くの私立大学の大きな課題となっている。中学校、高等学校を通して重要な教科として学習したはずの「英語」の学力を測定することなく、英語の基礎学力に無関係に大学側が応募者を入学許可した結果である。

これを解決するためのネットワーク利用のe-Learning教材として『大学生のための英語リメディアル教育教材*University Voices*』を開発した。英語の基礎的な言語能力を十分に身につけてきていない新入生を対象にして、2～3ヶ月程度の集中学習で、大学での英語授業に対応できるような力を体得させることが目的である。とうぜん自然で発展的な、英語の基礎言語能力の育成を図ることになる。

新しいタイプの教材なので、この教材の目的、構成、学習課題の内容と共に制作の経緯と過程についても述べている。

キーワード
基礎学力、e-Learning教材、リメディアル教育、学習課題

1．はじめに

1980年代の初めから導入され始めた「ゆとりある教育」の教育政策が、結果的にはわが国の初等、中等教育の質の低下をもたらしたこと、90年代になってから大学、特に私立大学で、多様な入試制度が導入されたこと、さらには92年をピークにして以降18歳人口の急激な減少があり、事実上応募者全員入学となっている大学が増加したことなどによって、入学時の英語力が不十分な学生が急増している。現在、日本の大学、特に多くの私立大学で大きな問題となっている。中学校、高等学校を通して重要な教科として学習したはずの「英語」の学力を測定することなく、英語の基礎学力に無関係に、大学側がやむなく多くの応募者を入学許可した結果である。

2000年10月に大学英語教育学会が実施した実態調査の結果によると、入学時にプレースメントテストなどを実施して英語の学力に応じたクラス編成をして指導にあたっていた4年制大学は、4割を超えていた（40.3％）。導入の予定を含めると、この学力別クラス編成が既に半数を超えていた（51.1％）。さらに約2割（18.0％）の大学で学力不足の学生に対する補習授業が既に実施されていたのである（大学英語教育学会実態調査委員会2002）。

この動きは年々増幅されているはずで、英語学力が不十分な新入生への対処をどのようにするかが現在の大学英語教育の大きな一つの課題となっている。

この問題を解決するための一つの手段として、いわゆる「リメディアル教育」のための、自立学習を可能にす

[1)] 元千葉大学
[2)] 早稲田大学
[3)] 清泉女子大学
[4)] 青山学院大学
[5)] 千葉商科大学
[6)] 埼玉医科大学
[7)] 東京女学館大学
[8)] 中部大学
[9)] 駿河台大学
[10)] 東京女子大学
[11)] 東京大学
[12)] メディア教育開発センター

るコンピュータ利用のe-Learning教材の研究開発が企画された。そして制作されたのが、『大学生のための英語リメディアル教育教材“*University Voices*”』である。

新しいタイプのネットワーク利用のe-Learning教材なので、この教材の目的、構成、学習課題の内容だけでなく、制作の経緯、経過についても述べることにする。

２．教材制作の目的

中学校、高等学校を通して履修していながら英語の基礎的な言語能力を身につけてきていない学生を対象にして、1日1時間週5回、あるいは1日2時間週3回、2～3ヶ月程度の集中学習で、大学での英語授業に対応できるような基本的な力を体得させることが目的である。

既に一通りの学習経験を持つ学生が対象なので、「入門コース」あるいは「初級コース」ではなく、いわゆるリメディアル教育（Remedial Education）の教材である。e-Learning教材とし、学内のCALLシステム､コンピュータネットワークなどを活用し、授業時だけではなく学生が自由な時間に、自主的に進んで個別学習ができるようなものとする。学習への興味、成就感、学習仲間との競争、協力、教員あるいは補助教員などの指導助言、励ましなどによって学習の動機を持続させ、自立的、集中的に学習に取り組ませて、自然で発展的な、英語の基礎言語能力を体得させることをねらっている。

３．制作の経緯

3.1　制作の基本的な考え方を決め陣容を整える

問題を抱える現在の大学英語教育にとって、この教材開発は意義ある重要なプロジェクトである。2002年5月23日、アドバイザー（編集主幹＋編集顧問）会議が開催されて上の「2. 教材制作の目的」で述べたようなネットワークを活用する形態のe-Learning教材開発に関連して制作の基本的な考え方がまとめられた。表1に示す通りである。

この基本的な考え方をふまえたe-Learning教材の制作の仕事はとうぜん膨大なものになる。そのためには相当数の有能な人たちの協力が必須である。1)充分な、本格的な英語運用力を持つこと、2)健全な言語教育観を持ち研究心を持つこと、3)英語の教材開発、特に中学校、高等学校程度の教材開発の経験を持つこと、4)この教材開発に大きな興味と関心を持ち、制作に情熱を持つことなどが勘案されて11名の全陣容が整った。

3.2　制作の過程

この11名の委員全員による第1回編集会議が開催されたのが8月9日である。そこではアドバイザーによって「教材制作の基本的な考え方」、「素材(案)」、および「プログラムの構成(案)」が示され、自由な話し合いが持た

表1　教材制作の基本的な考え方

教材制作の基本的な考え方

1. 言語能力の育成のためには音声言語による練習が基本となる。言語は本来音声言語であるというだけはなく、音声によることによって合理的かつ経済的な練習が実現し、言語練習が効率的になるからである。
2. 文字言語の力は音声言語の基本的な力を基底にもつのでなければならない。英語の基礎言語能力の育成がねらいのこの英語リメディアル教材では、文字英語の教材を扱う場合でもその音声英語を土台として反映させることが望ましい。
3. ここでいう英語の基本的な力は現行の英語教科書でいえばおおよそ中学校1、2、3年次、高等学校1年次で扱っている範囲の程度といってよい。
4. 語彙については特定の枠を考えないで、教材の内容に即して自由に使った方がよい。
5. 易から難の段階を踏むこと。しかも、常に学習者の力を適切に判断し、その力に応じて、適当な段階を指示し学習を進めることができること。
6. 学生の好奇心を喚起し、興味をもち夢中になって学習に取り組むことができるような内容の教材とすること。
7. 語彙にしても、文構造にしても、また文化的な事項にしても、学習上の必要に応じて、また学習者の必要に応じて、解説などが出るように工夫すること。学習者の興味を喚起するような語彙の説明もあるとよい。最近の学習辞典には例えば*Longman Active Study Dictionary*など非常によいものも出ていて参考になる。語の意味範囲、使われ方などの説明は大切である。おおかたの学習者は日本語の単語とまったく同じ語が英語にあるものと誤解する。文構造の説明は文法用語の使用を極力ひかえて、イラストなどを使って構造そのものを把握させ、納得して練習できるようにさせることが重要である。文化的な事項については､例えばジェスチャーなどは、映像によってその場面を出して説明を加えれば一目瞭然で効果的であろう。対話の場面であれば必要に応じて日本語同等表現もみることが出来るようになっていることは重要である。
8. この教材の初めの相当部分は音声英語と文字英語を統合的に扱うものとなるであろうし、中間から後半は徐々にリスニングとリーディングの二つに焦点を置いた形の教材になるのではないかと思われる。
9. 一般的に現在のCALLシステムはマルチメディアの機能をもった設備を整えている。この英語リメディアル教材のコースもその設備を十分に活用することができるようにしたい。音声だけでなく映像の機能を十分に使うようにしてもらいたい。
10. 外国語学習教材の制作にあたっては音声の録音再生の上で特別な配慮が必要である。この教材の制作にあたっては周波数特性、ダイナミックレンジなど、可能な限り言語音声の物理的な欠落がないようにすべきである。

以上

れた。以来、幾度となくこの会議が招集されて仕事が進められた。対話文とそれに関連する叙述文を新たに創作して素材とするという重要事項を決定したのもこの会議であった。委員の中のアメリカ人とニュージーランド人の二人のネイティヴスピーカーが創作したものを使うことになったのである。

また、この教材プログラムの構成内容も、学習課題の形態も次第に固められていった。そして、委員によるこの教材開発の執筆の仕事が進む過程でも、プログラムシステム作成担当側と交渉を持ちながら、教材プログラムの構成内容の検討はさらに進み、次第に最終的な形へと固まっていったのであった。

大学の一般的なネットワーク環境の可能性を勘案するプログラムシステム作成担当側によって、編集委員側が最善を求めて提出する要求案が実現不可能としていくつも葬り去られたのは残念なことであった。

例えば、1)自然な動画の映像を使うこと、2)学生の発音を分析してモデル発音との相違を示すこと、3)音声英語での学生との対話を可能にすること、4)学生が打ち込む文字英語表現を受けて分析し、正答に近い可能性の程度を示すこと、などと数多い。

各部分の担当執筆者から出てくる原稿は編集会議で検討され、次は全体を見通したアドバイザーによる調整の仕事となる。この種の教材制作の宿命であるが、実はこの仕事が容易なものではなかったのである。単に修正を加えるという程度を超えて、例えばいくつかの項目では全体を通して書き直す、作り直すというようなことになる。そして、さらに全部の原稿が整った段階で、長時間に及ぶ学習課題全体の最終検討をしたのであった。

専門のネイティヴスピーカーの声優による教材の録音に入ったのは12月10日である。録音スタジオにおけるこの録音の作業は、制作担当会社側が最初に想定した時間数をかなり超過し、最後の、4回目となった録音が行われたのは2003年2月4日であった。録音には毎回編集委員会側からアドバイザーとネイティヴスピーカーが立ち会って種々のチェック、変更、要求、指示などをした。とうぜん時間がかかる。言語教育のための教材制作では極めて重要なことだからである。

例えば、1)自然な発話になっていない、2)発音が一般的ではない、標準発音からずれ過ぎていてこの教材には不適当である、3)全体の調子が暗い、4)遅い速度の発話にはなっていない、5)発音があいまい過ぎる、舌が回っていない、6)声が疲れている、7)原稿の表現を変更したい、などである。

録音も終わった最後の段階で、編集主幹と二人のネイティヴスピーカーは2月25～28日の四日間、面と向かって計40時間余りを費やして、すべての英語表現を主に、全体を通して再チェックし、調整し、完全を期したのであった。外国語の教材制作では特に重要な仕事である。

こうして出来上がった素材はプログラムシステム制作担当側に回されて、作業が進行した。編集主幹もその場に何回か出向いて意見を述べてはいるが、ここで重要な役割を果たしたのが、プログラミングに明るくCALL教材開発の経験のある2名の編集委員会のメンバーであった。システム制作担当側に協力し、教材プログラムのWeb構成の具体化に主導的な大きな力を発揮したのである。この種のe-Learning教材の制作に当っては不可欠なことのように思われる。

なお、さらにこうして組み上がったプログラムは完成を待たずに既に2月末にはインターネットのWebページに載せられて全編集委員の細心な点検を受け、種々の指摘を受け､要望なども取り入れられてさらに改善が進み、完成に近づいていったのであった。

そして、2003年5月上旬、実際に実験校の大学のシステムに組み込まれ、この教材による試行実験指導が始まったのであった。『大学生のための英語リメディアル教育教材“*University Voices*”』の完成である。

４．教材の素材について：対話文と叙述文

この教材制作の目的に適合する素材として、まず対話文を主とし、それに関連づける形での叙述文を整えた。この教材が対象とする大学生が身近に感じられるような場面での、自然な対話の言語表現として‘**Dialog**’の音声英語（Spoken English）をまず基本の素材としたのである。非常に基本的で単純な表現から、かなり複雑で長く、難しい言語表現までを自然な形で提示できることはいうまでもない。この対話表現に関連づける形で叙述文の‘**Passage**’を準備し、文字英語（Written English）への橋渡しとした。

対話文の‘**Dialog**’が全部で15、叙述文の‘**Passage**’は5である。そして同一のテーマ（**Theme**）の下に三つの‘**Dialog**’と一つの‘**Passage**’がまとまってグループをつくり、**Theme I**、**II**、**III**、**IV**、**V**と展開している。つまり、**Theme I**（Dialog 1、Dialog 2、Dialog 3、Passage 1）、**Theme II**（Dialog 4、Dialog 5、Dialog 6、Passage 2）、**Theme III**（Dialog 7、Dialog 8、Dialog 9、Passage 3）、**Theme IV**（Dialog 10、Dialog 11、Dialog 12、Passage 4）、**Theme V**（Dialog 13、Dialog 14、Dialog 15、Passage 5）となっている。

Theme Iは高校を卒業して大学入学までの場面から、**Theme II**は大学1年目、**Theme III**は大学2年目、**Theme IV**は大学3年目、**Theme V**が大学4年目の場面からとなっている。高校の卒業パーティーから始まり、大学新入生のオリエンテーション、Eメールのやり取り、最初の授業、ポップミュージック、大学寮生活、オーストラリアでのホームステイ、インターネット検索、人権問題、就職活動等々と、確かに学生にとって身近で、興

味深いものばかりである。

英語表現はこの教材の目的から、極端に俗っぽいものは入っていない。しかし、現代っ子の雰囲気が感じられるような言い回しは案外多く、若い大学生をひきつける魅力に富んでいるのではないかと思う。最後に資料として**Dialog 2**と**Passage 4**のテキストを載せることにする。

なお、録音作業については既に述べたが、専門のネイティヴスピーカーの声優がごく自然に、真正な話し方で表情豊かに演技している。普通の速度のものと、少しゆっくり遅い速度ではあるが自然な話し方のものとを入れてある。

５．教材の構成と学習課題の内容

5.1　教材全体の構成

上で述べたように、この教材は日本人の学生が、高等学校を卒業して大学に入り、経験を積みながら成長していく過程を扱っている。そして、その様々な場面が学年ごとに**Theme I**から**Theme V**の5つのテーマに分けられて構成されている。各**Theme**はそれぞれ3つの**Dialog**と1つの**Passage**からなっている。**Dialog**は対話文を、**Passage**は叙述文を扱っている。表2にこの教材全体の構成と各課のタイトルを示す。

このプログラムは、けっきょく全体で20のユニット（Dialog＝15、Passage＝5）で構成されていることになる。自習用として使うことも、また授業の中で教員の指導のもとに使うこともできる。

表2　教材全体の構成とタイトル

Theme I	**Leaving High School and Entering University**
Dialog 1	A High School Graduation Party
Dialog 2	Student to Student International Calls
Dialog 3	University Orientation
Passage 1	Email Exchange
Theme II	**First Year of University**
Dialog 4	The First Day of Class
Dialog 5	Chat Room Research
Dialog 6	What's Hip Internationally?
Passage 2	Who's Who in International Pop Culture?
Theme III	**Second Year of University**
Dialog 7	A Welcome Party for International Students
Dialog 8	Dormitory Life in the US and Japan
Dialog 9	Dating, Crafts and Hot Springs
Passage 3	Culture You Can't Learn From a Book
Theme IV	**Third Year of University**
Dialog 10	Searching the Web
Dialog 11	A City Slicker Goes to a Farm
Dialog 12	An Australian Beach Barbeque
Passage 4	A Letter to a Professor
Theme V	**Fourth Year of University**
Dialog 13	A Health Center in Bangladesh
Dialog 14	Human Rights and Trafficking
Dialog 15	Tell Me About Your Skills
Passage 5	A Child-Friendly World

5.2　Dialogの構成と学習課題

5.2.1　Dialogと学習課題の構成

Dialogはある場面での、比較的まとまりがあって自然に展開する対話文である。この**Dialog**を**Part 1**から**Part 4**と4つのパートに小分けして順に学習できるようにしてある。こうすることによってずっと容易に学習が進み、効果も上がるからである。最後に全体のまとめとして**Part 5**が置かれている。この**Part 5**では、**Part 1**から**Part 4**と小分けして学習した対話文の全体が対象となる。

各パートの学習課題（**Task**）の構成は表3に示す通りである。

各行末尾の数字は画面数を示す。例えば、1/12は全体で12画面あるうちの最初の画面。この数字は各画面のタイトルバー上に表示されるので学生は自分が全体のどの位置にいるかを確認することができる。

最初の**Let's get started.**は**Part**の導入画面となっている。画面上にはそれぞれの**Part**で扱う対話文に関連するイラストが表示される。このイラストを見て、これから聞くダイアログの内容を想像したあと、画面下部の［**Next**］ボタンをクリックすると**Task 1**の画面に移る。

表3　Dialog各パートの学習課題の構成

Dialog 1:　A High School Graduation Party

Part 1

Let's get started.［導入画面］(1/12)
Task 1　Listen carefully.［リスニング］(2/12)
Task 2　Key Words［キーワード聞き取り］(3/12)
Task 3　True or false?［正誤判定］(4/12)
Task 4　Which one is best?［適語選択］(5/12)
Task 5　Pronunciation［発音練習］(6/12)
Task 6　Shadowing［シャドーイング練習］(7/12)
Task 7　Sentence Structure［文構造の学習］(8/12)
Task 8　Fill in the blanks.［穴埋め問題］(9/12)
Task 9　Complete the sentences.［整序問題］(10/12)
Task 10　Write in English.［英作文］(11/12)
Task 11　Fun with Words［単語クイズ］(12/12)

Part 2

（同上）

Part 3

（同上）

Part 4

（同上）

Part 5

Task 1　Listen carefully.［リスニング］(1/4)
Task 2　True or false?［正誤判定］(2/4)
Task 3　Which one is best?［適語選択］(3/4)
Task 4　Word Search［単語クイズ］(4/4)

5.2.2　Dialog学習課題画面の基本構成

図1は**Task 1**のサンプル画面である。画面の基本構成は各課題ともに共通である。

この画面のうち、①は「学習支援メニューバー」で、**Guidance**、**Progress**、**Grammar**、**Dictionary**、**My Words**、**BBS**の6つのアイコンが用意されている。**Guidance**はこの教材プログラムの構成、学習方法を解説しているページである。**Progress**は、学習の進捗状況や学習進度を確認するためのもの。インジケータによる進捗状況の表示の他に、音読に要した時間とスピード、ライティングで間違えた単語のリスト、全問題に対する正解数（何問中何問正解だったか）、正誤問題や選択問題を何回目でパスしたかなどの成績も表示する。**Grammar**は、文法事項を簡潔に解説した「文法ノート」である。学習の途中で必要に応じていつでも参照することができる。**Dictionary**は、株式会社三省堂発行の英和・和英辞典の他、国語辞典が用意されていて、字引として検索利用できる。**BBS**はいわゆる「電子掲示板」のページである。教員と学生、あるいは学生同士のコミュニケーション・ツールとして利用できる。これらのメニュー・アイコンは、それぞれのメニューを参照したいときにクリックする。

この他に、このプログラムには独自の「簡易単語帳」**My Words**が搭載されているが、これは学生が学習の途中で出会う未知語や重要語を、その用例とともに記載・登録しておくための電子単語帳である。図2はその「**My Words**の語句・用例登録画面」であるが、使用法はこの図2の中に示す通りで、簡単である。なお、単語とその用例の登録はキーボード入力とcut & paste方式のいずれも可能である。

図1「**Dialog**の学習課題画面の基本構成」に戻るが、②は「学習ガイド」**How to study**で、ここには各学習課題ごとの学習方法について、より詳しい解説がある。③の**Characters**をクリックすると、各**Theme**ごとの登場人物紹介を参照することができる。

④は課題画面ごとのヘッダー情報である。ここには現在取り組んでいる学習課題の**Theme**番号、**Dialog**（または**Passage**）番号とそのタイトル、パート番号（**Parts 1-5**）とページ番号（n/N）、および学習課題名がそれぞれ英文または英数字で記載されている。なお、ページ番号（＝画面番号）のNはそのパートの総ページ数を、nは現在ページ数を示す。

図1　Dialog学習課題画面の基本構成

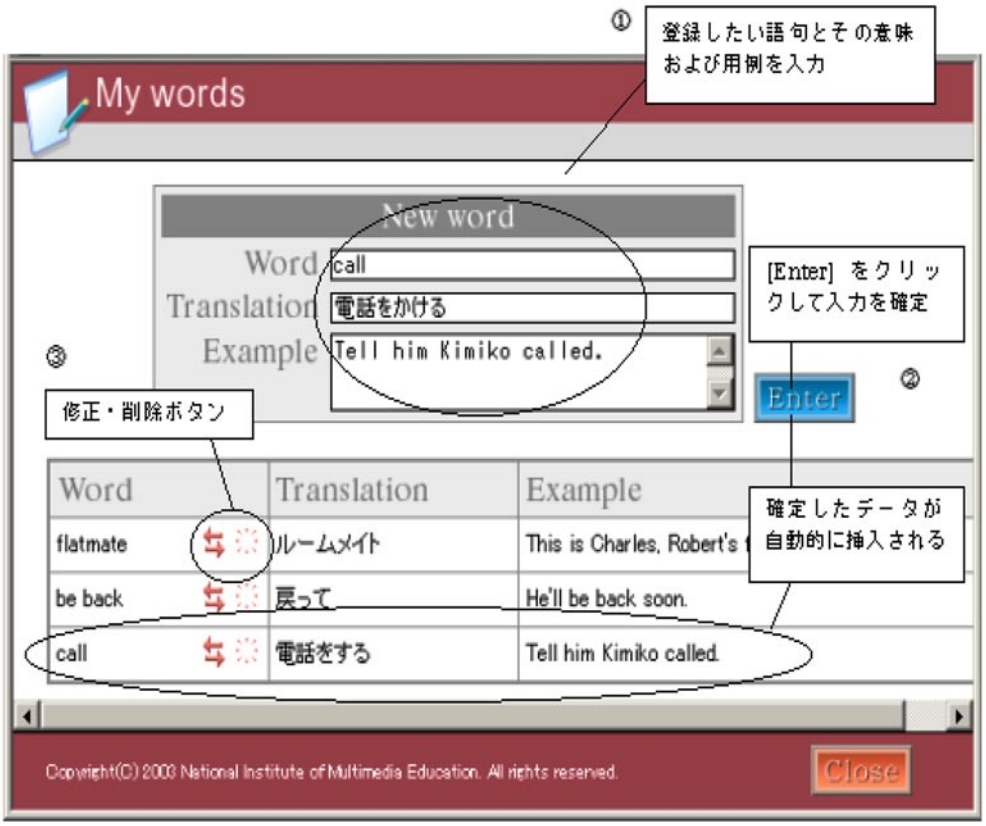

図2　My Wordsの語句・用例登録画面

⑤は各画面ごとの学習課題（**Task**）指示文である。ここで十分に説明できないことは前述の「学習ガイド」（**How to study**）に詳しく書いてある。

⑥は作業アイコンバーである。左端には［**Back**］アイコン、右端には［**Next**］アイコンが置かれ、中間部にそれぞれの画面で使うことのできる作業アイコンが配置されている。それぞれのアイコンはいずれもアクティブな状態（赤で表示）のときにのみ有効である。基本的には左側から順番にアクティブになっていくように設計されている。

5.2.3　Dialogの学習課題の内容

前に述べたように、**Dialog**の**Part 1**から**Part 4**までは同じ学習課題構成となっている。最初の導入画面（**Let's get started.**）に続いて**Task 1**（**Listen carefully.**）でそのパートの課題文のリスニングを行い、これに基づいて**Task 2**（**Key Words**）＝キーワード聞き取り問題、**Task 3**（**True or false?**）＝正誤判定問題、**Task 4**（**Which one is best?**）＝適語選択問題、**Task 5**（**Pronunciation**）＝発音練習、**Task 6**（**Shadowing**）＝シャドーイング練習、**Task 7**（**Sentence Structure**）＝文構造の学習、**Task 8**（**Fill in the blanks.**）＝穴埋め問題、**Task 9**（**Complete the sentences.**）＝整序問題、**Task 10**（**Write in English.**）＝英作文と、1つずつ順番に易から難、大まかなことから細かいことへ、単純から複雑へと学習が進むようになっている。最後の**Task 11**（**Fun with words**）＝単語クイズは**Dialog**とは直接関係のないワードゲームである。学習の息抜きとして楽しく取り組めるようにと考えて組み入れてある。

Part 5では、4つのパートに小分けして学習した**Dialog**全体を通しての復習となる。学習課題の内容は、最初の導入画面（**Let's get started.**）に続いて**Task 1**（**Listen carefully.**）でその**Dialog**全体を通したリスニングを行う。小分けして学習した対話を今度は通して聞くことになる。学生は、わかる英語で展開する意外に豊かな対話の場面に触れて、学習の成果を実感する。そして次にその内容に関する学習課題が続く。**Task 2**（**True or false?**）＝正誤判定問題、そして、**Task 3**（**Which one is best?**）＝適語選択問題となる。最後は**Task 4**（**Fun with words**）＝単語クイズのワードゲームとなっている。

5.3　Passageの構成と学習課題

5.3.1　Passageと学習課題の構成

Passageは、**Theme**の中の三つの**Dialog**（対話文）で扱わた内容に関連した叙述文で、やや長めの文章となっている。これも**Part 1**から**Part 4**の4つの部分に小分けされた構成となっていて、最後に全体のまとめとして**Part 5**が置かれている。この**Part 5**では、小分けし

表4　Passage各パートの学習課題の構成

Passage 1:　Email Exchange
- **Part 1**
  - Let's get started.［導入画面］(1/7)
  - Task 1 Read silently.［黙読］(2/7)
  - Task 2 Which one is best?［適語選択（四択）］(3/7)
  - Task 3 Listen carefully.［リスニング］(4/7)
  - Task 4 True or false?［正誤判定］(5/7)
  - Task 5 Shadowing［シャドーイング練習］(6/7)
  - Task 6 Read out loud.［音読］(7/7)
- **Part 2**
  - （同上）
- **Part 3**
  - （同上）
- **Part 4**
  - （同上）
- **Part 5**
  - Task 1 Complete the summary.［サマリー完成］(1/2)
  - Task 2 Crossword Puzzle［クロスワード］(2/2)

て学習したものを、一つの完結した文章として通して学習することができるようになっている。各**Part**はそれぞれ表4で示すような学習課題から構成されている。

最初の**Let's get started.**は各パートの導入画面である。画面上にはこのパートで学習する文章に関連したイラストが表示される。このイラストを見て、これから読む文章の内容を想像したあと、画面下部の［**Next**］ボタンをクリックすると**Task 1**の画面に移る。なお、**Passage**の各**Task**画面の構成は前に解説した**Dialog**の基本画面構成と同じである。

5.3.2　Passageの学習課題の内容

Passageのセクションも、**Dialog**と同じく**Part 1**から**Part 4**はいずれも同じ学習課題構成になっている（ただし総画面数は7）。最初に導入画面（**Let's get started.**）があり、続いて**Task 1**（**Read silently.**）でそのパートの課題文を黙読し、**Task 2**（**Which one is best?**）の適語選択（四択）問題で理解の確認がある。

なお、図3に示したが、Task 1の黙読練習画面では、課題文の前に［**Start**］ボタンが配置され、これをクリックするとリーディング時間の計測が始まるようになっている。読み終わった後［**Stop**］ボタンをクリックすると、かかった時間（秒数）と**WPM**（words per minute＝1分当たりの語数）値が自動表示される。内容を理解しながら、140 ± 20 **wpm**程度のスピードで読めるようになるまで繰り返し練習するように指導している。なお画面の「学習ガイド」（**How to study**）をクリックするとこの詳しい説明が出てくる。

次の**Task 3**では**Task 1**で読んだ英文のリスニング練習（**Listen carefully.**）をし、続いて**Task 4**（**True or false?**）の正誤判定問題に進む。**Task 5**はシャドーイング練習（**Shadowing**）となっている。シャドーイング練習はすでに**Dialog**の**Task 6**でもしているが、ここで

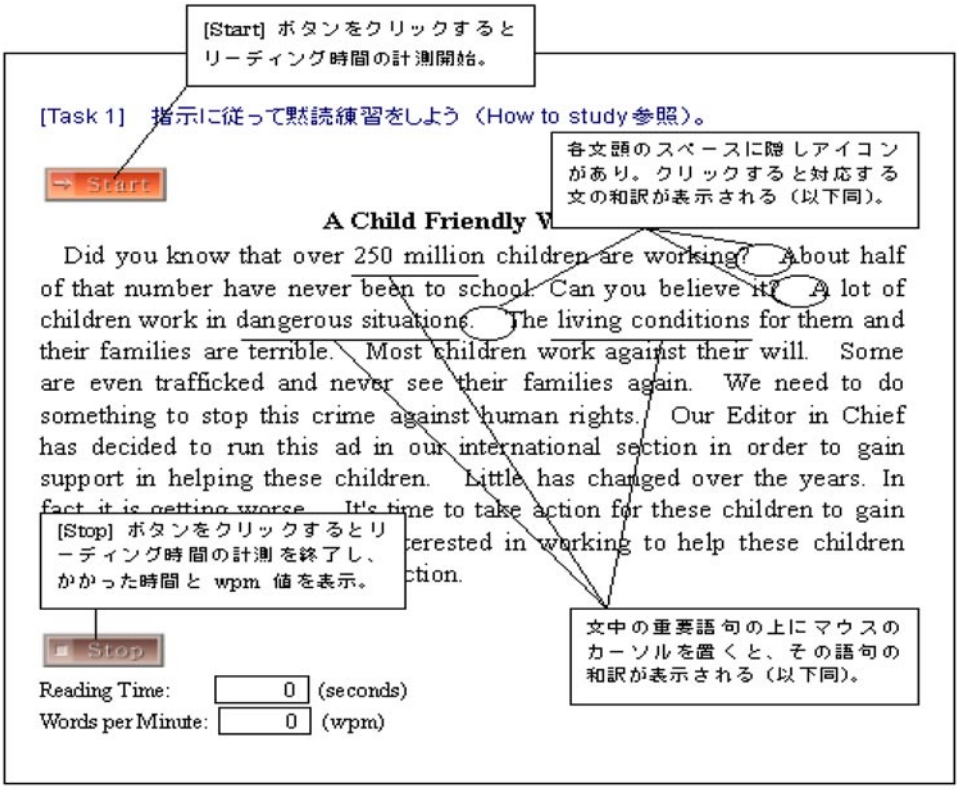

図3　［Task 1］の黙読練習画面

は対象となる英文が長いため、より一層の集中力が必要になる。テキストを見ないでできるようになるまで練習を繰り返すように指導している。モデル音声のスピードは［**Slow**］と［**Natural**］の2種類が用意されている。**Task 6**は音読（**Read out loud.**）課題である。ここでは、できるだけ英語らしい、しかも自然な読み方を心がけるようにと指導している。

Part 5は**Passage**全体のまとめとなっている。ここでは**Task 1**（**Complete the summary.**）のサマリー完成問題と、**Task 2**（**Crossword Puzzle**）のクロスワードパズルの2つの学習課題が用意されている。

６．学習課題作成の意図と原則

ここではこの教材プログラムの中で採用されている学習課題がどのような意図で、どのような原則で作られているかを述べる。

6.1　Dialogの学習課題について

Task 1（**Listen carefully.**）＝リスニング：イラストを見て対話場面を想像しながら集中して対話に耳を傾け、その内容を理解しようとさせる。自然な普通の速度のもの［**Natural**］と、少し遅い速度ではあるが自然な話し方のもの［**Slow**］を、クリックして選んで聞くことができるようになっている。

Task 2（**Key Words**）＝キーワード聞き取り問題：この学習課題は単なる記憶のテストではない。英語の対話を聞いて理解し、その内容が把握できれば、概念として頭に残るはずである。それを見るためにこのテスト形式を利用するという考え方でこの学習課題を作成している。従って、英語力が十分にあれば1回聞いただけで迷うことなく正解が得られるようなものとなっている。また、選択肢は5個とし、正解を3個としている。

この学習課題作成の原則は次の通りである。1)基本的に単純で明解な問題とする、2)正誤がはっきりしている、3)同類語を入れない、4)類似音語を入れない、5)初出語で難易度の高い語はさける［1000語内を原則として、3000語を超えない］、ただし、前出語はこの限りではない、6)誤選択肢は前出（あるいは後出）の語から選んでよい。

Task 3（**True or false?**）＝正誤判定問題：対話の内容に関する短くて易しい英語表現を聞いて、正誤を判定する問題である。問題は3題である。それぞれ平易な英文ではあるが始めて聞く表現で、対話の中の英語表現をそのまま使ってはいない。解答中にクリックして対話を何度でも自由に聞くことができるようになっている。また、解答判定後にはクリックして英文をみることができるようになっているし、その音声も聞くことができる。そして訳と正解をみることもできる。

Task 4（**Which one is best?**）＝適語選択問題：短くて易しい文字英語表現を読み、空欄にしてある下線部に入るべき語句を選んで対話の内容に合う文として完成させる問題である。4選択肢の問題で3題である。この学習課題の活動を通して音声英語の表現がいっそう文字英語の表現に自然に結びつくことを期待している。

Task 5（**Pronunciation**）＝発音練習：この発音練習の学習課題作成の原則は次の通りである。1)発音指導のための特別プログラムを作成する余裕はなかったが、日本語を母語とする人の弱点に焦点をあて、必要な子音、母音、音連結を取り上げ、分かりやすく、指示通りやれば誰でもその発音ができるような解説をする。2)ことばのリズム、ことばの流れにも注意を向けさせる。3)音声モデルを与え、実際に声を出して練習できるようにする。4)日本語音と違う音を表わすのには、この教材が対象とする学習者のことを考えれば、解説の中ではカタカナ表記を併用せざるをえない。その場合、その表記によれば結果的に英語の音に近づくような､表記上の工夫をする。5)しかし、発音表記のためにはできるだけIPA（国際音標文字）を使う。辞書で一般的に広く使われているIPAの表記を学び、慣れさせることも必要である。

Task 6（**Shadowing**）＝シャドーイング練習：シャドーイング練習とは、言語音声を後追いの形でそっくりそのまま声に出して復唱する練習のことをいう。言語の音の感覚の体得とか、言語を聞いて理解する力の体得には非常に効果的な練習方法である。もちろん話す力の向上にもつながる。本来はテキストを見ないで行う練習方法であるが、ここではまずテキストを見ながらシャドーイング練習をして（＝「聞き読み」）、音の感覚がつかめたところで、改めてテキストなしのシャドーイング練習を行うように指導している。テキストの表示／非表示は画面下部中央にある［**Text**］［**No Text**］ボタンでコントロールできるようになっている。

Task 7（**Sentence Structure**）＝文構造の学習：この学習課題の作成にあたっては特に次のようなことに注意している。1)毎回（**Dialog**の各**Part**）のテキストの中から一つの文表現を選び、その文構造をまずよく理解させ、その表現の意味を明確に把握させることをねらう。2)文構造中心の素材ではないので、とうぜん限度があるが､文表現の選定にはできるだけ短いものから長いもの、単純から複雑、易から難の段階を考慮する。3)できるだけ、簡潔で、誤解を与えないような解説にする。4)文法用語を使ってはいるが､その使用は必要最小限に止める。5)次に発展させるために、解説の最後にそこで取り上げた文構造をもつ五つの英語文表現に訳を添え、読ませるようにする。

Task 8（**Fill in the blanks.**）＝穴埋め問題：**Task 7**の最後で読んだ五つの英語文表現を使った穴埋め問題である。穴埋めは1語程度であり、日本語同等表現も添えら

れていて極めて平易な問題となっている。文構造上重要な語を自分で打ち込ませることによって、文の構造に注目させ、その理解を確実にすることが目的である。とうぜんそれぞれの文の理解はいっそう深まる。

Task 9（**Complete the sentences.**）= 整序問題：**Task 7**、**Task 8**で扱われたものと同じような5つの英文が使われているが、日本語表現が与えられていてそれに対応する英語表現を完成させる課題となっている。こんどは文の中の大半の語を自分でクリックして正しく並べかえなければならないようになっている。キーボードから打ち込むこともできるようになっている。文構造の理解がいっそう深まるだけではなく、その力が着実に身についてくる。

Task 10（**Write in English**）= 英作文：日本語表現が与えられていてそれに対応する英語表現を作るいわゆる英作文の課題である。ここでは自分で作った英語表現を実際にキーボードを使って打ち込ませるようになっている。多くの場合、正解は一つではなく、複数準備されていて打ち込まれた英文が判断される。

関連する**Task 7**、**Task 8**、**Task 9**、**Task 10**を通した学習課題作成の原則は次のようになっている。1)**Task 7**でテキストの中から選んだ文表現の一つの文構造をよく理解させ、表現の意味を明確に把握させる。2)その後、**Task 8**、**Task 9**、**Task 10**と異なる三つの学習課題による活動が段階的に続いて、同じ文構造の学習を徹底させる。3)学習課題はどれも順を追ってやれば誰でもできるようにして、できるだけ抵抗なく学習を進めることができるようにする。4)この学習課題の中のすべての英語表現は、英語を母語とする人たちが異様に感じるような表現を可能な限り排除する。5)この中の英語表現は、現代の学生の興味、現実使用の可能性、有用性なども考慮して作成する。6)コース前半の**Theme I**、**II**、**III**の中のこれらの学習課題はそれぞれ段階的な展開を特に意図しているが、後半の**Theme IV**、**V**の中の学習課題は変化を与えて若干抵抗を感じさせるようなものも入ってくるようにする。

Task 11（**Fun with words**）= 単語クイズ：**Dialog**とは直接関係がない。**Task 1**〜**10**の学習課題をやり終えてほっとしたところで、気分転換になるようにゲームを楽しませることがねらいである。このワードゲームに出てくる語彙に親しんで、いつの間にか親近感をもつようになればそれでよしとする。

6.2　Passageの学習課題について

Task 1（**Read silently**）= 黙読：ここでは読みの速度を自動的に計ることができるようになっている。学生一人ひとりの読みの速度を計ってリーディングの指導をすることが、このように容易にできるようになったのである。もっとも、ここでは速読の練習が直接の目的ではない。頭の中で、英文を日本語で分解して理解しようとすることを排除するためである。1分間に120語以上の速度となると、英語をそのまま直接理解しようとしなければならなくなる。いわゆる直読直解がねらいである。

Task 6（**Read out loud.**）= 音読：ここでは、できるだけ英語らしい、しかも自然な読み方を心がけるようにと指導している。つまり、その英語表現の意味、内容を充分に意識した自然な口頭表現をさせることをねらっている。音読は、印刷されている文字英語を自分の英語の力で音声英語の表現に生き返らせる活動である。考えてみると、「音読は英語の文字情報を自分の力で英語として正確なプロソディー情報に変換する」活動ということもできるわけで、重要な学習課題ということができる。ここでは、**Task 5**のシャドーイング練習によって課題文の音のイメージが頭に残っているはずで、正確なプロソディーの再現はそれほど難しいことではない。

7．教材制作にあたっての留意点と想定学習時間

編集委員会がこの教材開発の実際の仕事に当って「3.1　制作の基本的な考え方を決め陣容を整える」であげた「教材制作の基本的な考え方」によったことは言うまでもない。さらに結果的に特に留意したことをあげると次の通りである。

1)様々に不幸な学習経験をもち、英語学習が不成功に終わってしまっている青年たちが対象であるということを常に意識する。2)せっかく大学に入学してきた若い人たちのプライドを傷つけないようにする。幼稚な入門期英語の単なる蒸し返しにならないようにする。3)人間の言語としての英語に、あらためて本質的に触れさせて、母語とは異なる言語を習得できるよろこびを味わわせる。4)このプログラムでは**CALL**（コンピュータ支援の言語学習）の特性を活かして、学生の好奇心を喚起し、真の英語習得につながる学習課題を種々工夫して、豊富に提供し、自分の意志で練習し、解決し、英語学習を成功させることをねらう。5)音声表現の録音に際しては、できるだけ自然で､豊かなものとなるようにと心掛けた。普通の速度のものと、学習課題の目的から若干遅い速度のものも準備した。遅い速度のものであっても自然な音声表現となっている。また音質にも留意した。

全体で20のユニット（**Dialog**=15、**Passage**=5）で構成されている教材プログラムであるが、当然のことながら学生の個人差は大きいし、学習者中心の学習となるわけで、学習時間などについては自由に考えてよい。**Theme I-V**の全部を通して使ってもよし(**A**)、**Theme I-IV**とか、また**Theme II-V**とか限定して(**B**)使うこともできる。その想定学習時間は表5に示す通りである。

各ユニットの**Part 1**から**Part 5**を、それぞれ30分の学習時間で済ませるということにすると、計算上はこの

表5　想定学習時間

想定学習時間：
A＝**Themes I**，**II**，**III**，**IV**，**V**の全部を通して使う場合
B＝**Themes I**，**II**，**III**，**IV**，**V**または**Themes II**，**III**，**IV**，**V**と限定して使う場合
1 **Part**の必要学習時間を30分と仮定すると；
A：5 Parts×20＝100 Parts
30 minutes×100（Parts）＝3000 minutes＝50 hours
B：5 Parts×16＝80 Parts
30 minutes×80（Parts）＝2400 minutes＝40 hours
〈1日1時間、週5回〉
A：50/5 hours＝10週；**B**：40/5 hours＝8週
〈1日2時間、週3回〉
A：50/6 hours＝8.3週；**B**：40/6 hours＝6.7週

表5に示すように10週で終わることになる。1ユニットを平均150分程度で仕上げるという想定である。しかし、この教材は本来学生が個別に、自立的に使って学習できるように作られている。特に初めのうちは、ゆとりを持って週に1ユニットのペースで、全体を20週で終えるぐらいの気楽な目標がよい。馴れて興味もわいてくると、夢中になって学習に没頭するようになる。これまでの試行実験報告によると、やはり授業時間の中で、教員あるいは補助教員の指導助言のもとに使うことを軸にし、それに加えて発展的に自由な使い方をさせるのがより大きな効果が期待できる。学生同士励ましあい、刺激しあって、競争心も出てくるようである。（小野 博ほか 2003、鈴木 薫 2004）

もっとも固定して考えることはない。同じところを繰り返し、満足するまで練習するという場合もいくらでもある。学生は様々である。各ユニットの学習時間は学生の英語の力のレベルやニーズに応じて様々になると考えられる。

8．おわりに

このe-Learning教材の開発はたしかに膨大な作業量をともなう大きな仕事であった。それだけに学生に対する配慮が行き届いた教材になったと確信する。これが実際に広く使われて、多くの大学生が自然で発展的な、英語の基本的言語能力を身につけ、大学の英語授業に楽しく参加して積極的にさらに力を伸ばし、それぞれの世界を切り開いてこれからの時代に羽ばたいてくれればと願うばかりである。

この教材プログラムの画面の**Guidance**をクリックすると教材の構成、学習の方法についての詳しい説明が出てくる。このような**e-Learning**教材には必須のものであると思われるが、この教材の仕組みが明快に解説されているだけではなく、この教材による学習過程が鮮やかに記述され分析された結果の学習方法の説明となっている。委員の染谷泰正によるものであるが、「5. 教材の構成と学習課題の内容」はそれを参考にしてまとめたものである。

謝　辞

この有意義な教材開発は多くの人々の力が結集されてはじめて完成したものである。この仕事に関わった全関係者とその担当を示して感謝の意を表明したい。

企画・製作：メディア教育開発センター　メディア教材開発事業
製作担当：小野　博（メディア教育開発センター）、中原　淳（メディア教育開発センター）
製作協力：株式会社三省堂、株式会社タクミ
編修主幹：國吉丈夫（元千葉大学）
編修顧問：神保尚武（早稲田大学）、石田雅近（清泉女子大学）、木村松雄（青山学院大学）
編修委員会：酒井志延（千葉商科大学）、笹島　茂（埼玉医科大学）、生内裕子（東京女学館大学）、河内山晶子（中部大学）、染谷泰正（青山学院大学）、Renée A. Sawazaki（駿河台大学）、Elizabeth J. Lange（東京女子大学）
本文執筆：Renée A. Sawazaki、Elizabeth J. Lange
問題作成：國吉丈夫、神保尚武、木村松雄、酒井志延、笹島茂、生内裕子、河内山晶子、染谷泰正、Renée A. Sawazaki、Elizabeth J. Lange
英文校閲：Renée A. Sawazaki、Elizabeth J. Lange
Web 構成：染谷泰正、酒井志延
システム開発：株式会社タクミ
監修：株式会社三省堂
著作者：文部科学省大学共同利用機関　メディア教育開発センター

（平成17年6月14日受付）

参考文献

［1］ 大学英語教育学会実態調査委員会『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究－大学の学部・学科編－』pp.34、35、46、2002。
［2］ 小野　博、國吉丈夫、酒井志延、鈴木　薫、野口ジュディ、杉森直樹「英語リメディアル教材の検証実験」外国語教育メディア学会（LET）関東支部　第113回（2003年度）研究大会［研究発表］2003年11月8日　小樽商科大学
［3］ 鈴木　薫、「学力低下とリメディアル教育－短期大学の現状－」外国語教育メディア学会（LET）第44回（2004年度）全国研究大会［支部シンポジウム：学力低下とリメディアル教育］2004年7月29日　福岡国際会議場

資料１：

Theme I：Leaving High School and Entering University
Dialog 2　Student to Student International Calls

Introduction

Robert is back in England and is now living near his university. Akiko is getting ready for her new university classes in Tokyo. Akiko calls Robert. The phone rings and Charles, Robert's friend, answers.

ロバートはイギリスに帰っていて、彼が通う大学のそばにいま住んでいます。明子は東京で今度入学する大学の授業の準備をしています。明子がロバートに電話をします。電話のベルが鳴り、ロバートの友人のチャールズが電話に出ます。

（Part 1）
Charles：Hello.
Akiko：Hi, Robert.　It's Akiko.
Charles：Sorry.　This is Charles, Robert's flatmate.　Robert will be back soon.　May I take a message?
Akiko：Yes, please.　Tell him Akiko called.
（Part 2）
Charles：Oh, Akiko, from Japan.　I've heard a lot about you.
Akiko：Really?　That's nice.　He told me about you too.　How do you like university life?
Charles：It's good.　I'm in my second year now.　I'll give Robert your message.　Does he have your number?
Akiko：Yes.　And tell him to dial 81, and drop the first zero.
Charles: OK.　Sure.
（Part 3）
（*Robert calls Akiko back.*）
Robert：Hi, Akiko.
Akiko：Robert, where were you?　You promised to be home.
Robert：I'm so sorry.　My cat's tail caught on fire.　I had to take it to the vet.
Akiko：Stop telling tall tales.　You don't even have a cat.
Robert：Well, actually, I was working late.
（Part 4）
Akiko：Oh, I understand.　I have a favor to ask you.　I want to go to England this summer.　Can you help me find a homestay family?
Robert：Why don't you stay with my parents?　You can visit me on the weekends.　I'll give them a call and ask.
Akiko：Thank you so much.　Email me about it later.
Robert：O.K.　I'll write to you soon.
Akiko：All right.　Bye.
Robert：Bye.

資料2：

Theme IV：Third Year of University
Passage 4　A Letter to a Professor

Introduction

Shintaro wrote a letter to his English teacher, Professor Peterson, in Japan. He had written Shintaro a letter of recommendation for his studies at Massey University.

慎太郎は日本にいる彼の英語の先生であるピーターソン教授へ手紙を書きました。教授は慎太郎にマッシー大学での勉学のために推薦状を書いてあげました。

（Part 1）

P.O. Box 254
Palmerston North
New Zealand

April 15, 2002

Prof. James Peterson
Sapporo Chuo University
Kita Nijo Nishi 6-chome
Kita-ku, Sapporo
060-0202 JAPAN

Dear Prof. Peterson,

I'm sorry for not writing sooner. How is life in Sapporo? I hope you are well. I am enjoying my studies at Massey University. Thank you again for the letter of recommendation you wrote for me. Your support means a lot to me.

（Part 2）

Let me tell you about some of my interesting experiences. In December, I stayed on a farm in the North Island of New Zealand with a wonderful family. Now I understand where my wool sweaters come from!　I watched a shearing gang shear sheep and even tried it myself. Have you ever seen sheep shearing before? In the woolshed, men sheared the wool off each sheep in one piece called a fleece. Women picked them up and threw them on a table. They pulled off dirty pieces and rolled them up to make bales of wool to sell. It was so exciting. When I tried it, I was not so successful. It was really tough work. And my poor sheep knew I was not a professional. It stepped on my foot when I cut it. I've enclosed a photo of me shearing a sheep and another one of me milking a cow by hand. That was really fun.

（Part 3）

Food on the farm was delicious－so fresh and tasty. I loved my host mother's dinners, especially her roast lamb and homemade desserts. Did you know that sweet potatoes are called *kumera* in Maori?　I really learned a lot. I liked my homestay brother and sister too. Even though my New Zealand sister teased me a lot, we got along well. My trip to Australia was wonderful too. I had a great time at Bondi Beach during Easter vacation. I went to the Lifesavers' Club fundraiser barbeque and met some neat people. I played in a beach volleyball competition. I had never played beach volleyball before, so I lost the first game. It was fun anyway.

（Part 4）

My research at Massey University is coming along well. The librarian has been very helpful. She showed me how to use the computer system to find information on goat and sheep milking for making cheese. After I get enough information from the library, I will contact experts in this area. I hope my graduate thesis will be useful for farmers in Hokkaido.

When I come back this summer, I will contact you. You will be surprised by how much my English has improved. This is such a wonderful place to live and study. Thank you again for all of your support. Please write to me if you have time.

Sincerely,

Shintaro Suzuki

國吉　丈夫

1930年千葉県生まれ。千葉大学教育学部英語科卒業（'53）。千葉市立中学校教諭（'53～'55）。千葉県立高等学校教諭（'55～'66）。国際基督教大学大学院（'66～'68）学園紛争中退。千葉工業大学専任講師（'68～'71）。千葉大学教育学部講師、助教授、教授、同大学院教授を経て停年退職（'71～'96）。千葉経済大学教授（'96～'02）。ロンドン大学留学（'76～'77）。なお放送大学客員教授（'84～'94）として『英語Ⅰ』および『英語Ⅳ』担当、TV放送。現在、外国語教育メディア学会（LET）名誉会長、大学英語教育学会（JACET）顧問。

神保　尚武

早稲田大学商学部教授。国際基督教大学教養学部人文科学科卒業、ハワイ大学大学院英文学修士課程修了、早稲田大学大学院文学研究科博士課程退学。1991年－1994年NHKラジオ「基礎英語」講師。大学英語教育学会副会長。英語教育学・教材開発、中等教育英語科教員養成。Power On English Ⅰ、Ⅱ（東京書籍'03､'04）、Paragraphs That Communicate（MACMILLAN LANGUAGEHOUSE '05）

石田　雅近

早稲田大学教育学部卒。東京外国語大学外国語学部卒。ハワイ大学大学院ESL修士課程修了、テキサス大学博士課程中退。英語教育協議会（ELEC）研修部専任講師を経て、現在は清泉女子大学大学院人文科学研究科言語文化専攻教授。専門は英語教育学、英語学。大学英語教育学会、日本リメディアル教育学会、ELEC同友会英語教育学会､外国語教育メディア学会会員。

木村　松雄

1953年東京生まれ。青山学院大学文学部英米文学科卒業。国立兵庫教育大学大学院言語系修了（教育学修士）。東京大学教育学部附属中高等学校教諭、同学部講師（後期英語科教育法）を経て、現在青山学院大学文学部教授、総合研究所人文科学研究部長。大学英語教育学会（JACET）本部代表幹事。語学教育研究所評議員。専門は英語教育学（方法論、評価論、一貫制英語教育シラバス設計）。NHK「基礎英語1」講師（1998-2001）、文部省社会通信教育教材審査委員、文部省英語資格検定試験基準審査委員、文部科学省SELHI第1期指定高松第一高等学校運営指導委員、文部科学省指定広島県芸北地域教育課程研究開発運営指導委員。

酒井　志延

1952年島根県。1976年東京教育大学文学部卒。1990年上越教育大学修了。1980年より埼玉県県立高校教諭。1996年桜の聖母短期大学助教授。2001年千葉商科大学助教授。2003年千葉商科大学教授。2003年メディア教育開発センター客員助教授。2004年メディア教育開発センター客員教授。日本リメディアル教育学会会員。e-Learningの開発、英語のリメディアル教育研究や現職英語教員の研修について研究。

笹島　茂

1954年群馬県生まれ。1978年埼玉大・教育学部卒。同年埼玉県高校教諭として赴任。以後19年英語教育を中心として埼玉県高校教育に貢献。1997年埼玉医科大学講師となり、大学英語教育学会幹事、日本医学英語教育学会評議委員、日英英語教育学会運営委員、大塚英語教育研究会幹事などに従事。2004年オーストラリア・ニューイングランド大学修士課程修了。2005年より英国スターリング大学博士課程在学。専門分野は英語教育、外国語教員研修、ESP（English for Specific Purposes）。

生内　裕子

1983年津田塾大学学芸学部英文学科卒業。1983年神戸常盤女子高等学校英語教諭。1989年コロンビア大学大学院修士課程修了（応用言語学専攻）。1992年東京女学館短期大学専任講師。1995年助教授。2002年東京女学館大学助教授。現在に至る。

河内山　晶子

萩高校、九州大学文学部英語学英文学専攻卒。コロンビア大学で外国語教育修士号・筑波大学で日本語教育修士号・東京大学で言語情報科学修士号取得。東京大学博士課程修了。現在中部大学人文学部英語英米文化学科助教授。大学英語教育学会等にて活動。情報工学への強い関心を持ち、自律的学習者育成を目指して、動機・ストラテジー・学習スタイルに焦点を当てた、理解プロセス・認知・メタ認知の研究に従事。

染谷　泰正

1950年生まれ。カナダ･ウォータールー大学卒。東京大学大学院修了。現在、青山学院大学文学部英米文学科助教授。専門は言語情報科学、コーパス言語学、ESP（ビジネス英語）、通訳理論・通訳教育方法論。海外で実務経験を積んだ後、1986年にロゴス語学システム研究所設立。以後、同研究所の代表として、英語学習教材の開発にかかわる研究と執筆活動を中心に、各種通訳･翻訳業務にも従事。2002年より現職。日本通訳学会理事。

澤崎レンネ・アリス

1991年カリフォルニア大学バークレイ校・経済学部卒業（University of California, Berkeley; BA in Economics）。1998年国際トレーニング大学院大学・英語教育修士課程修了（School for International Training, Vermont, USA; MA in TESOL）。現在、駿河台大学・文化情報学部・英語専任講師。高校・大学生向きの英語教材を出版。英語教育方法論の研究に従事。JALT（全国語学教育学会）､JACET（大学英語教育学会）、TESOL（Teachers of English to Speakers of Other Languages）、ETJ（English Teachers in Japan）各会員。

ランギ・エリザベス・J（Elizabeth J. Lange）

ニュージーランド国ビクトリア大学政治学・アジア研究学部卒業（Victoria University, NZ, BA in Political Science & Asian Studies）。同ビクトリア大学英語教育修士課程修了（Victoria University, NZ, MA in TESOL）。ニュージーランド、オーストラリア、韓国、日本で英語教育に従事。現在、東京女子大学現代文化学部言語文化学科専任講師。専門は応用言語学。現在主として語彙研究に従事。著書にNew Ways in TESOL Series、Longman's Impact Words & Phrasesなどがある。

中原　淳（なかはら　じゅん）
東京大学大学総合教育研究センター講師・TREEプロジェクトコーディネータ。
東京大学教育学部、大阪大学大学院人間科学研究科、文部科学省メディア教育開発センター助手をへて2005年４月より現職。大阪大学博士（人間科学）。大学教育の情報化、企業の人材育成に関する研究、携帯電話を活用した学習システム開発など。主編著として「eラーニング・マネジメント」（オーム社）、「社会人大学院へ行こう」（NHK出版）、「ここからはじまる人材育成－ワークプレイスラーニング入門」（中央経済社）、「大学eラーニングの経営戦略：成功の条件」（東京電機大学出版会）などがある。2004年、フルブライト奨学金により渡米、米国マサチューセッツ工科大学客員研究員。日本教育工学会研究奨励賞・論文賞を複数受賞。

小野　博（お　の　ひろし）
1945年生まれ。1971年慶応義塾大学工学部電気工学科修士課程修了後、慶応義塾大学医学部耳鼻咽喉科入局、1973年助手。1981年東京学芸大学特殊教育研究施設助教授、1990年大学入試センター研究開発部教授、2000年メディア教育開発センター研究開発部教授、現在に至る。音声、聴覚に関する研究、バイリンガル、入試研究、母語及び外国語の習得における言語環境の影響、基礎学力に対応したリメディアル教育の研究等に従事。日本リメディアル教育学会会長、日本放送芸術学会理事など。

The Development of e-Learning Remedial English Courseware for University Students, “*University Voices*”

Takeo Kuniyoshi[1)]・Hisatake Jimbo[2)]・Masachika Ishida[3)]
Matsuo Kimura[4)]・Shien Sakai[5)]・Shigeru Sasajima[6)]
Hiroko Haenouchi[7)]・Akiko Kochiyama[8)]・Yasumasa Someya[4)]
Renée A. Sawazaki[9)]・Elizabeth J. Lange[10)]・Jun Nakahara[11)]
Hiroshi Ono[12)]

One of the biggest problems that have emerged in language education at universities in Japan is the low level of the students’ English proficiency. Due to demographic reality, a considerable number of applicants are now admitted without taking English language tests. This may also be a reflection of the inadequacy of English language education at secondary schools.

During the 2002-2003 academic years, a team of eleven university professors were invited to develop e-Learning remedial English courseware for university use. After spending an enormous amount of time and energy the team has successfully produced the courseware titled “*University Voices*”. The purpose is to help students develop their fundamental English language ability.

Keywords
language education, English proficiency, demographic reality, remedial English courseware

[1)] Chiba University (ret.)
[2)] Waseda University
[3)] Seisen University
[4)] Aoyama Gakuin University
[5)] Chiba University of Commerce
[6)] Saitama Medical School
[7)] Tokyo Jogakkan College
[8)] Chubu University
[9)] Surugadai University
[10)] Tokyo Woman’s Christian University
[11)] The University of Tokyo
[12)] National Institute of Multimedia Education